

句
遊

第六集

平成十五年三月

序に代えて

石野喜次

「句遊会」は平成二年三月に、監査懇話会の特別部会（現在の生涯学習部会）の一つとして発足しました。

同年四月から毎月句会を行い、本年三月に第五十六回目の定例会句会を持つことが出来ました。

合同句集の「句遊」も第六集になりました。

今回は平成十三年と十四年の二年間の作品から一人十八句ずつ収めています。

句会は一つの場を共有する座であります。

尾形仿の「座の文学」によれば、座は「孤独を自覚する者同士が、日常性と別次元の関係でつながり、生きる楽しみを共にする」場であります。

俳句を趣味とする同好の士が集い、個性豊かな作品を発表し、お互いの研鑽と交歓の場を長年続けることが出来たのは、誠に有意義なことであります。

ただ淋しいことはこの年月の間に、健康等の理由で句会のメンバーから去られ、また句集の紙上から

消えた諸先輩の居られることです。

手許の六冊の句集を読み返しますと、かつての会員の彫心鏤骨の作品と温容がよみがえる気がします。句碑が石で作られたものであるとすれば、この句集は紙で作られた碑ではないでしょうか。

新しい会員と共に、より良い内容の「紙碑」を作って行きたいと考える次第です。

読者の皆様には、本集を温かい目でご覧頂き、今後共「句遊会」を応援して頂ければ、これに過ぎる喜びはありません。

(付 記)

平成十三年、十四年度句遊会の活動状況

月例句会：平成十五年三月が第一五六回

写友会、画友会との合同展　：平成十三年十月

同　　平成十四年十月

吟行句会：平成十三年 四月　隅田公園花見

平成十三年十一月　深川八幡西の市

平成十四年 五月　根津権現つつじ祭

平成十四年十一月　湯島天神菊まつり

目次

紙	碑	石野喜双	六	
父の	日	岩瀬登	八	
残る	暑さ	勝賀瀬ゆうじ	一〇	
箱根の	四季(六)	武井治	一二	
ひぐらし		田中保一郎	一四	
火焰	土器	中路素童	一六	
村芝居		生江沢広雄	一八	
貴晩晴		林泰亀	二〇	
この	世	藤川道夫	二二	
薔薇	一花	三宅申	二四	
さそり	座	宮川弘道	二六	
自	分	史	六川二郎	二八

作

品

五

紙

碑

石
野
喜
双

六

老い先は転ばぬやうに初詣

春寒や能の舞台に火が入り

東大寺青い目の子に鹿の子寄る

初蝶や屋根の向かうは日本海

春の宵勝手口から親の家

春雨や橋の向かうに蔵の町

噴水に音楽祭の余韻なほ

三社祭茶髪半纏薄化粧

海女の日々舟に働き舟に老ゆ

ケータイの声に披さる遠花火

沈黙の宇宙の便り流れ星

いざ酌まんどツクの後の月見酒

ゴンドラの髭のテノレ良夜かな

長城にゴビの風吹く爽やかさ

大江戸の辰巳に床し酉の市

井の出前を囲む夜業の日

逝く友を寮歌で送る冬三日月

年の暮一行また消す住所録

父の目

八

岩瀬登

鐘の音二日ばかりの初湯かな

桜散る家無き人が布団干す

父の日に手作りカレーのプレゼント

無精ひげなでゐし今日は走り梅雨

解禁日テレビの鮎に舌鼓

パラソルをくるくる廻し娘の来たる

園児らの砂のトンネル西日さす

風立ちて炎天にまた時戻る

夏のれん程よき風を運び来る

忘れしか友一人来ず夏終る

長崎の涙か雨の原爆忌

秋晴るる天に斜めの飛行機雲

サイレンの音遠ざかる冬銀河

校庭の雪にあしあと縦横無尽

八十から無料ですよと焼芋屋

タクシーを待つ列長し雪しまき

どちやう鍋相席客と和む夜

残る暑さ

一〇

勝賀瀬ゆうじ

浅草寺歩巾のばせぬ初詣

窓越しの寒月枝にかかりをり

正座して閉めきる玻璃や冴返る

白梅や天神詣での茶髪なる

小銭入忘れてもどる春浅し

啓蟄や多くなりたる一人言

行く春や鹿屋の方へ鐘を撞く

轉や寺の庇に山かくれ

困碁の窓新樹の色をとり込めり

かたつむり無線解讀思ひをり

緑陰に折たたみ椅子のぼしけり

湯のみ持ち詰碁すすまぬ端居かな

新涼の肩の手拭芝居めく

背を見つつ背中見せつつ踊りの輪

やうやくに残る暑さを惜しみけり

名月の見えぬ奥の間早寝をす

露踏めば散歩の道の遠かりし

年の暮何かと予定重たかり

箱根の四季（六）

一一一

武井治

蒼空に雪吹き上ぐる風の富士

段避けて廻り道する初詣

凍てゆるみ春待つ庭の動きかな

枝々の棘を力に山椒の芽

露の臺見つけた妻の声はずむ

大文字草雨重なれば俯むきて

雨に倦む夏鶯の濁り声

七月の海がくつきり峠越え

野の草に後ろ手ついて夏の雲

石庭の石それぞれの日永かな

山ぬれて里に日のさす初時雨

縁側に妻と星飛ぶ夜なりけり

立秋は斯かる日のこと庭を掃く

山吹の一葉とどめず枯れにけり

枯葉道こころ楽しき日の歩調

飴色に大根煮えて我癒えむ

雪折の枝に多影のこりけり

小鳥来る冬雲切れて日が射せば

ひぐらし

一四

田中保一郎

ひとつこと済ませし心地初詣

冬帽子違ふ自分になりけり

石段を登り下りする梅見かな

裸木に雀鈴生り寒明くる

春雨や傘差して行く古本屋

川沿ひに八十八夜の雨光り

紫陽花の咲き誇り居る工場かな

靴音の高きは女梅雨晴間

綠蔭や老人と犬話し居り

文庫本膝にのせたる端居かな

長電話ひぐらしの声その中に

曼珠沙華空に眞白な雲いくつ

新涼や朝の新聞じつくりと

土づくりいそしむ妻に秋の空

旋盤の音きりきりと夜業の灯

対岸の車の響き秋の暮

木枯しや火の見櫓の残る町

為す事の無き日が続き冬の蠅

火焰土器

一六

中路素童

春浅し巫女の背凜と舞ひ始む

春寒や落し火残る登り窯

天神の臍に結ぶ恋みくじ

配膳を終へて出を待つ花見船

古都吹く風苑に散る花残る花

咲き急ぎ散り急ぐ花逝きし友

権現のつつじ名残りの色と葉に

水切りし豆腐艶めく嵯峨阜月

島泊り明けに昂る夏の潮

斑紋に星の色秘め天道虫

語り継ぐ人も少なき震災忌

大擗仰ぎ仰ぎて秋の天

どの葉にも明けの瑠璃光露の玉

踊の輪廻り終りて闇の界

束の間の芒盛りて越の道

鮫鱧鍋鬼の平蔵現はれさう

浅草や争乱遠き年の暮

恋の火の土に籠りて雪深し

村 芝 居

一八

生 江 沢 広 雄

ふぐ食ふて昔話や同級生

雪解けの水玉きらり輝けり

春障子映る小枝に鳥の影

草の芽や微笑もらす道祖神

村芝居蝶の舞ひくる笛太鼓

荒梅雨や棚田に水の溢れをり

那須の原明けゆく夏の匂ひかな

空澄みて額差しかへし月見かな

菊日とお囃子響く峡の町

枯れ菊や庄屋の居間の掛時計

ざるかぶりおかめの笑顔熊手かな

黄落や芭蕉の句碑の見当らず

枯木立当麻の塔の空の青

初時雨池面にゆらぐ東塔

半眼に浄土をうつすや蓮の花

散紅葉尼僧の掃く手とまりけり

万年池亀亀亀の日向ぼこ

しみじみと健康願ふ年の暮

貴 晩 晴

林 泰 亀

生きて在り世紀を越えし初湯かな

草の芽や巖根を割りて空仰ぐ

春浅しまなこ厳しき受験生

選抜の球児の声や花開く

往年の美女もかくやとつつじ花

ペタル踏む乙女の髪や風光る

バブルかなあの日あの夜の鮎尽くし

華やげる日傘の女歩み来る

ふるさとはいま白桃の熟るるらん

C 蔭に午睡の猫や腹太し

新涼の風に命を貰ひけり

碧き眼も手振り可笑しく踊りの輪

照り映えののうぜんかつら凌霄花 風に舞ふ

鈴なりの熟柿の垂れりなまこ堀

無爲といふ倅せもあり月の夜

立冬や樹々の装ひそれなりに

壮年期夜業麻雀梯子酒

着ぶくれて貫禄増せり山の神

この世

二三

藤川道夫

寅さんとひばりで年があらたまり

初詣帰りには又汁粉屋へ

招魂祭台湾軍の威儀正し

屋台見る子の手に揺れる蛍かご

母の日や妻は娘と長電話

短夜に大河小説読みはじめ

一塊の波立ちと見れば鮎上る

浜の宿夕餉の海女の座持ちかな

噴水や無念無想の居士もをり

カタカナ語辞典読みつつ冷酒かな

乳母車シエードは母のひからかさ日傘

所在なさ体温測る夏の風邪

新涼や子が深呼吸まねて居り

秋の夜や借り多き身の淺き夢

葉の尖端さきの露ごとにある小宇宙

この世をば我が世とぞ咲くポピー園

予言つひに当らざりけり年の暮

あみだくじ負けた娘が行く焼芋屋

薔薇一花

三宅 申

屠蘇に酔ふままに見入れる桃源図

萬葉歌碑白蝶湖をわたりけり

乃木邸の花散り急ぐ夕かな

人人人つつじ躑躅の根津権現

牡丹描く明日は崩れむあやふさに

弾語りきく大道に夕立雲

外出のメモ残されて薔薇一花

歩みきし一筋みちの夕焼かな

冷酒に來し方透けてみえにけり

いつしかに雨となりきて石露の花

ななかまどの紅葉の果てに正教会

荒寥の浜に秋思の啄木像

秋冷の襜かげりくる奥穂高

雨ひそとユーミンを聴く秋夜かな

天を衝く松ひともの冬夕焼

早梅のうるみて海の濃かりけり

湧出づる湯のまろやかに去年今年

冬帽子目深に歩む六区かな

さそり座

二六

宮川弘道

初詣友碧き瞳の児をつれて

湯の華は草津土産の初湯かな

春立つや老舗出てくる女声

千枚の春田となりて伊達郡

昨日五分今日は八分の桜花

蛍の子森の泉に育ちをり

四万十川しまんとの鮎あしとる人の屋形船

百姓の後手に立つ青田かな

焦げるだけ肌をこがせし夏の果

さそり座は何処いづくと聞けば星流る

卒寿なる姉の育てし葉鶏頭

機織はたを夜なべの母でありしかな

もみぢ葉の色の深まる三つ峠

築地塀囲む旧家の新松子

秋雲の上に翼下の富士の山

三脚の梯子自在に松手入

磴高き身延の寺や石路の花

移り来て心あらたに除夜の鐘

自 分 史

二八

六 川 二 郎

初蝶や変身願望今にして

躑躅散る躑躅も知らぬ恋をせむ

行く春やカラオケ三昧声乱る

恋蚩かくれてはまた乱れとぶ

緑陰や旧き倉庫の鍵の錆び

仮の世の思ひの丈を蟬時雨

穂高嶺に雲定まらず晩夏光

老境は焦らざるべし百日紅

舌頭に三転せしめ葡萄食む

ご老体と呼ばれ口惜し烏瓜

しがらみも風化のあなた花木槿

石榴咲くアルハンブラの夢茫々

漂ふてとまりそこねて秋の蝶

枯蓮矢の突き折れし静寂かな

熱爛や酔ふて元気を分ち合ひ

自分史も荏苒^{じんぜん}として冬木立

行く年や魑魅魍魎^{ちみもうりょう}の多かりき

大寒や星の光も縮みをり

あとがき

『句遊』第六集をお届けします。

創刊が平成五年ですから、丁度十年目になりました。内容も充実してきたのではないかと自画自賛しております。

本集への出句は十二名で、前集よりさらに二名減となりました。なお、岩瀬登さんは、退会されましたが、句が残っておりましたので、会の方で選択して載せました。

新会員の勧誘について、引続き皆様のご支援、ご協力をお願いします。

吟行句会は、平成十三年、十四年とそれぞれ二回行いました。今後もできるだけ増やそうと思っております。

編集に当り、出句は従来同様、自選十八句としました。また前置き、ルビは原則としてつけぬことといたしておりますのでご了承下さい。

次集第七集は平成十七年を予定しております。皆様の一層のご精進とご健吟を祈念いたします。

編集委員

石野 喜次
勝賀瀬雄次
中路 良昭
生江沢広雄

平成十五年三月

(中路 良昭記)